

はじめに

愛知県のほぼ中央に安城市というまちがある。名古屋への通勤圏であり、また農業も盛んな土地だ。二〇一七（平成二十九）年六月、「アンフォーレ」という図書館と商業施設から成る複合施設が駅至近に開館した。マスクミで取り上げられることもしばしばあり、二〇二〇（令和二）年の Library of the Year も受賞している、すでに一定の実績を認められている施設である。

ひよんなことから、筆者はこの施設の建設計画に参加する機会を得、そこでワークショップのファシリテーターやアドバイザーとして活動してきた。筆者は当時、図書館情報学を専門とする研究職についていた。そのため、全国各地の図書館から助言を求められたり、逆にいろいろと教えられたりすることは多くあったが、アンフォーレの諸活動を目の当たりにしていると、これは従来の日本の図書館とはどうやら違うぞという感覚がひしひしと湧いてきた。

新奇的な図書館をつくって耳目を集めるのは、ある意味ではたやすい。一方で古典的な図書館の出現であれば、従来の図書館ファンは満足する。しかしアンフォーレはそのどちらにも偏っていない。この図書館は、これまでの図書館の伝統を尊重しながら革新的な試みもいくつか行っている。つまり高度なバランスがみえる。ここでいうバランスとは妥協のことではなく、複数の相反する要求を高次元で調和させることだ。これはなぜ実現できたのか。市役所の内部の人間でもない、完全に外部の人間でもない立場からその理由を丁寧にとどりとく思われた。図書館は主に本を貸し出す場所であるという認識は、一九六三（昭和三十八）年に日本図書館協会から刊行さ

れた『中小都市における公共図書館の運営（通称 中小レポート）』および、一九七〇（昭和四十五）年に発行された『市民の図書館』によって決定づけられたと解釈される。一方で図書館先進国といわれる北欧や米国の状況をみると、図書館は図書を貸し出す場から、さまざまな人々が交流する場へと変貌を遂げている。日本にもそのような図書館は増えつつあるもののアンフォーレの水準で伝統的なサービスと新たなサービスを融合させた例は少ない。

ある時代を牽引した図書館は、その関係者の経験談や苦闘の記録が一書として残されることが多い。例えば、東京都日野市立図書館、静岡市立御幸町図書館、長野県小布施町立図書館、岩手県紫波町オガールなどが即座に挙げられよう（もちろんそれ以外にも多数存在する）。それらの関係者に敬意を示しつつも、類書の多くは図書館関係者やジャーナリストによる筆であることが多く、行政や利用者といった広角な視点から扱うものはほとんど存在しなかった。

そこで本書は、求められる機能が変わりゆく時代の図書館に係る多様な人々に焦点を当て、各人がどのように活動してきたかを捉えることとした。具体的には、市長、建築家、デザイナー、行政職員、図書館員、利用者など、さまざまな立場からの記述をまとめ、アンフォーレの多層性を少しでも描き出すことを試みている。このような趣旨のもとで執筆を依頼し、承諾が得られた場合は本人自身に文章を執筆いただき、執筆時間が取りづらい等の理由がある場合は筆者が主担当としてヒアリングを実施し、そこでの発話を元にして原稿を作成した。

執筆、もしくはヒアリングするにあたって、職業の属性という仮面をつけるのではなく、顔も名もある一人ひとりがどのように考え、どのように工夫し、時にどのように失敗し、どう衝突したか、綺麗ごと一辺倒ではない形で表現していただきたいと依頼した。というのも立ち上げから運用に至るまで、意見の相違やそれに伴う衝突も多く生じたと耳にしたからだ。それらは関係する各人が真剣に議論を戦わせた結果であり、新図書館づくりへ

の熱意の現れと言ひ換えることができるだろう。したがって本書にはぶしつけな表現も含まれている。どうかご容赦ねがいたい。一方で、これが市役所関係者の筆によるもの!?!と驚くべき諸語（かいたま）に満ちた文章もある。筆者自身、編者としてとりまとめる際に吹き出すこともあった。発話原稿については当然、話者による確認を経てはいるものの、最終的な文責はすべて編者にある。

本書は「起動」「開発」「運用」「検証」の四部構成とした。図書館はいったん開館すれば、その後数十年は使いつづけるものだ。そこでこの図書館の立ち上げから運用に至るまでの経緯に加え、それらから得られた成果等も「検証」として扱うこととした。

第一部「起動」では、市長神谷学氏へのインタビューを収録した。当初は新図書館づくりに必ずしも賛同していなかったが、海外の先進的な図書館を視察しその必要性を強く認識したことや、それらの経験から得られたビジョンについて詳細に語られている。

第二部「開発」では、構想段階から計画策定、そして施設完成までを市議会がどう見てきたか、周囲の関係者がどのように活動してきたかを描写している。

加えて、図書館建築で多数の実績がありきわめて著名である三上建築事務所の益子一彦氏に設計の過程を寄稿していただいた。アンフォールのデザインを手掛けた廣村正彰氏は、東京オリンピックのピクトグラムなどで非常に著名であり、安城にゆかりのある方でもある。氏にはご多忙なかインタビューに対応していただいた。

第三部「運用」では、開館にあたり、従来のサービスの堅持しつつも、より利用者に資するため高度なサービスを導入した関係者の姿が示されている。

第四部「検証」では、はたしてアンフォールはにぎわい創出に寄与したのか、利用者の声や愛知工業大学の中井孝幸教授による分析も交えて明らかにする。

このように本書の全体構成は大きな流れをもつものの、興味をおぼえたところから読み始めてもらってもかまわない。

当然、本書に対しては「予算があったから」「首長の理解が得られたから」といった、「我々の図書館や行政の取り組みには参考にならない」という他の自治体職員等の意見は想定される。しかしアンフォーレは必ずしも積極的な理由によって成立したわけではないことが本書によって示されているし、他館に応用可能なアイデアが豊富に含まれてもいる。筆者からすればアンフォーレは綱渡りの連続上に成立した一種の奇跡に近いものだと思えているが、鳥瞰的に見れば他の自治体にも通じる問題意識やその課題解決方法が散りばめられていると思われる。

本書に登場する方々はアンフォーレに関わった大勢のごく一部に過ぎない。数えきれないほどの方々がさまざまな議論を重ねたことは重々承知しているものの紙幅の都合上、全員に登場いただくことはかなわなかった。なお筆者は現在、図書館づくりのコンサルタント会社である図書館総合研究所に所属しているが、インタビューをはじめとするほとんどの作業は前職時に行ったものであり、現在の業務との関連性はない。

本書は初代館長の岡田知之氏との議論をきっかけに生まれた。また、彼のこれまで培ってきた人脈や経験のおかげで、みなさまから貴重な原稿をいただくことができた。この場を借りて深くお礼申し上げる。最後に、カンとセンスと知識に裏づけられた編集作業を行っていたいただいた樹村房の安田愛氏、とりまとめや調整について尽力いただいた、アンフォーレ課の神谷美恵子氏、市川祐子氏に感謝を申し上げたい。彼女らの行き届いた心配りがなければ、本書は成立しなかった。

二〇一三年一月吉日

編者 岡部晋典

はじめに i

I 起動

神谷学市長インタビュー アンフォーレができるまで……………2

唐突な図書館建設の提案にカチンときました／議員当時の図書館との関わりは／海外視察調査で、図書館の重要性を目の当たりに／複合施設は類例のないスキームで／若者と商店街に託す期待／市長の仕事は“ご恩返し”

II 開発

構想段階から基本計画策定まで……………14

始動の兆し／中心市街地拠点整備基本構想／にぎわい創出とは／安城市中央図書館の課題／中心市街地拠点整備基本計画／事業用地の改善

事業計画策定から施設完成まで……………23

拠点施設としてのキャラクター／ハード整備に求められたもの／事業者選定から建設／着工から完成へ

要求水準の検証……………31

アンフォーレの事業形態——SPC①が担う事業と市の役割／設計業務／建設業務

▼コラム ザンゲ！……………37

三星元人副市長インタビュー ニューヨーク視察から学ぶ——新図書館への模索……………39

土地区画整理の担当課に配属され、運命的に市街地の活性化を担当／消去法で生まれた図書館移転？／ニューヨーク公共図書館を視察して、図書館の可能性を確信／PFIでありながら、図書館は直営という妙手に／地権者の協力あってこそそのアンフォーレ／図書館を、教育委員会から市長部局へ／アンフォーレの今後に期待すること

寄稿 図書情報館開設に至る市議会の関わり……………55

はじめに／当時の時代背景とは／中心市街地におけるまちなかの空洞化への懸念／中央図書館の過密化問題と、国による機能強化推奨／市議会における議論に時代背景が影響／市長のアメリカ視察が当時の流れを変えた？／百聞は一見に如かず。そこには市民に身近で頼りに

される図書館があった／誰のための図書館か？——市民のための図書館建設に向けて／さいごに

特別寄稿① 設計者から見たアンフォーレ建設計画……………63

敷地／事業の概要／外観のデザイン／にぎわいから静寂へつながる階構成／広場・公園、外周道路

特別インタビュー グラフィックデザイナー 廣村正彰氏

アンフォーレのデザインをめぐるささやかな対話……………87

アンフォーレのロゴマーク、サイン計画の由来／廣村デザインの誕生／サインは、本当はなにほうがいい？

ICT化基本構想……………96

チームアンフォーレの奇跡……………102

企画政策課長から図書館長へ／優男四人が突如として異動／男臭さに、空調機の故障が追い打ち／オープン一年を前に、さらに五人の補強／ランドオープン、「チームアンフォーレ」総員配置につけ／アンフォーレ建設は、遊び心豊かなプロジェクト／オープンセレモニーの後に

Ⅲ 運用

アンフォーレの現状整理……………	112
公民連携による施設整備の評価／アンフォーレでの運営上の新たな挑戦／開館三年を経過し ての効果の検証と課題の整理	
より良いスタート——総論・人的資源が重要……………	118
二つの目／スタッフの活躍／行政マンの奮闘	
排架計画とラベルの変更、「らBooks」の創設……………	124
排架計画は、利用者の利便性を最優先に考えて／「らBooks」の創設	
▼コラム 押樋良樹氏との出会い……………	131
情報発信の模索……………	133
配属まで／情報発信への体力づくり／ツイッターで毎日発信／図書情報館をつくっている途 中の話／図書情報館のパンフレット／職員へのPR／中央図書館での展示、図書情報館での 展示／図書館司書の情報発信について思うところ	

にぎやかな図書館……	148
ある日の光景／「図書館」とは何か／ディズニーストランドのホスピタリティ／「日本デンマーク」のにぎやかな図書館	
変わらないメインサービス① 二〇二〇年四月策定「安城市図書館運営基本計画」から……	155
変わらないメインサービス② 児童サービスに関わって……	161
コレクションの形成と蔵書の確保……	164
蔵書の特徴／新館用資料の購入／本はそとときしか買えない	
学校図書館支援サービスの拡大……	169
新たなサービスへの助走／新たな学校図書館支援サービス／公共図書館の役割	
職員インタビュー① にぎわいを創出する仕掛け!?……	175
職員インタビュー② 引っ越しとオープン直後……	182
▼コラム 引っ越しの怪……	195

職員インタビュー③	雑誌スポンサー制度の導入	196
職員インタビュー④	南吉コーナーと安城資料コーナーの新設	202
職員インタビュー⑤	サービスポイントとの連携	205
職員インタビュー⑥	ボランティアとの連携	210
	読み聞かせボランティア養成講座を、毎年開催／ボランティアとの心の距離／また図書館に戻ってきますよ	
職員インタビュー⑦	スタッフの出勤日管理	218
職員インタビュー⑧	イベント、講座、新美南吉絵本大賞	222
	まちなかに来て、イベント自体も様変わり／南吉絵本を、赤ちゃん向けの絵本と一緒に配る	
職員インタビュー⑨	障害者サービス	232
職員インタビュー⑩	スタッフによる児童サービス	240
	図書館のスタッフになってから、司書資格を取得／絵本の魅力を一人でも多くの子どもたち	

に伝えたい

職員インタビュー⑪ スタッフによる新人スタッフ教育……

247

▼コラム 新米司書としての意気込み……

253

IV 検証

中心市街地は活性化したか……

256

若者の集う喫茶店経営が原点／まちづくりに興味があり、市議会議員に／議会は消極的賛成。図書館プラスアルファの仕掛けがなければ、活性化は無理／アメリカ西海岸の視察で、図書館の可能性を体感／全議員参加による「拠点整備推進」プロジェクトチームの発足／行政運営にもビジネス感覚を／アンフォーレで、中心市街地は活性化したのか

特別寄稿② 日本一にぎやかな図書館をめざして……

269

明るくてにぎやかなエントランス／アンフォーレとの関わり／アンフォーレの空間構成について／来館者調査からみた図書館の利用状況／にぎわいのある図書館での音環境と滞在型利用

利用者の声① 子育て世代にインタビュー……

283

資料編

利用者の声② 学校の先生にインタビュー……………	289
利用者の声③ 利用者インタビュー・地域史を研究して……………	297

安城市図書館の変遷／施設の概要／図書情報館組織図／アンフォーレ平面図／安城図書館の沿革／図書館入館者数の推移／アンフォーレ本館入館者数の推移／貸出冊数の推移

おわりに……………	319
-----------	-----



I

起
動

アンフォーレができるまで

本書の発刊に際して、アンフォーレオープンから二年半ほどが経過した二〇二〇（令和二年）一月、神谷学市長にアンフォーレ整備を振り返っての想いなどを聞きました。

市長 「アンフォーレを建設してよかった」のひと言です。駐輪場にはいつも〇〇中学校とか、〇〇高校といったステッカーが貼ってある自転車がたくさんとまっています。自転車数の増減で子どもたちの動向がよくわかります。子連れの若い保護者もたくさん見かけます。未来を担う世代が、自ら好んで来館しているという光景に希望がもてますね。

唐突な図書館建設の提案にカチンとききました

——新図書館をつくらうという意見が出始めたころの市長の心中はいかがでしたか。

市長 二〇〇七（平成十九）年頃だったと思います。JR安城駅に近い総合病院の跡地利用を考えていたとき、



2017(平成 29)年 6 月 1 日アンフォーレオープニングセレモニー

跡地利用の担当者から新図書館構想を告げられ、寝耳に水の提案に「なぜ図書館なのか」とカチンときました。そのとき使われていた図書館（昭和六十年に建設）はまだ築二十年ほど。それなのに、もう新図書館をつくりましょうとは「突然何を言いだすのか」というのが私の感想でした。だから「なぜなのか、きちんと説明しろ」と強く求めたのです。

すると、市内公共施設で年間入場者数が最も多いのは「デンパーク」*、次点が図書館だと言うのです。当初はその数字を疑いましたが、担当者は「間違いない数字です」と言う。つまり、集客力に着目して新図書館を構想したということなのです。しかし、いくらさらなるにぎわい創出のためとはいえ、すでに図書館はあるじゃないですか。にもかかわらず、新しい図書館を建設することを市民にどう理解してもらおうのか、先の見通せない話だと思いました。

*デンパーク

安城市にある花とみどりのテーマパーク。一年を通して、約三三〇〇種三十万株もの四季の花を楽しめる。

その後、図書館担当者までもが移転新築は必要と言い出したため、現状はどんなものかと実際に見に行くことにしました。旧図書館は当時、同規模人口の都市との貸出冊数による比較という観点からすると全国有数の図書館といえましたが、評価されているという印象はありませんでした。そのため、私自身の目で確認する必要があります。かつて私が市議会議員だった当時と比べると本棚があちこちに追加されていて、館内が過密状態になっていました。「このままではいけない」、そう思いました。

議員当時の図書館との関わりは

——市議会議員当時というお話がありました。初当選は何歳ですか。

市長 二八歳です。まだ若かったから、本当に何もわからなくて……。何も知らない者が偉そうな顔をして議員報酬をいただいているのかという自問自答を重ねていました。まずは地方自治を基本から学ばなければいけないと思ひ、図書館でいろいろな勉強をしました。図書館になかった地方行政に関わる専門書は書店で購入し、図書館に持ち込んで熟読していました。専門書は地方の書店の棚には並んでいないので、わざわざ名古屋の大規模書店へ行って入手していましたよ。

市議会でごく単純な質問はできません。図書館には、周辺市の予算書や決算書なども置いてあり、他市の財政運営もわかります。議員として手にするのはあくまでも本市の予算書・決算書だけです、それだけを見ていてもわからないことが多い。そのため、周辺市の予算書や決算書も突き合わせて勉強していました。

——市長の議員初当選が一九八七（昭和六十二）年ということ、旧中央図書館ができたばかりのころです

ね。当時、議員で図書館にいらっしやるのは市長以外ほとんどいなかったとお聞きしましたが。

市長 失礼ながら、今でもそんなに多くいらっしやるわけではないと思います。図書館では多くの貴重な発見をしました。市議当時によく先輩議員から過去の市政功労者の話をお聞きしましたが、話を聞くだけだと想像を巡らせるだけで終わってしまいます。しかし、図書館で過去の地方新聞や議会会議録を読むと具体的な裏づけがとれる。それによって明確な市の歴史が脳裏に刻まれますよね。

新図書館建設に向けた話を進めたとき、やはり多くの市議から「なぜ図書館なのか」と言われました。そのなかでも、特に図書館に一度も行ったことのないような方の理解を得るのは本当に骨が折れました。

海外視察調査で、図書館の重要性を目の当たりに

市長 平成バブルが弾けた後は「失われた三十年」といわれてきました。失われっぱなしの時代に、リーマンショックや東日本大震災が起きました。そのころよく耳にしたのは「コンクリートから人へ」です。もはやハードの時代ではなく、箱モノ建設は悪という意識が醸成されていました。

二〇一五（平成二十七）年一月に私にとって四度目の市長選挙がありました。対抗馬はそれまで新図書館建設に理解を示していた方でしたが、選挙戦に入ったら「建設計画は白紙撤回します」と翻意された。態度が急変したのはなぜか。要は、新図書館設計画が政争の具とされてしまったのです。

市民からの疑義も示されました。新図書館基本計画を策定した後の二〇一一（平成二十三）年頃、「これからは電子書籍の時代なのに、なぜいまだに図書館なのか」という問題が提起されました。私はそれにまったく答えられなかった。そこで、日本よりも先に電子書籍ブームがきていたアメリカでは図書館は今どういう役割を果たし

ているのだろうか、役割そのものが変わってきているのだろうか、実際に現地へ見に行きました。そして、そこで腹が固まりました。

アメリカの図書館を視察してみても気づいたのは、私たちの建設計画と箱モノ批判とはまったく次元が違うということです。アメリカでは図書館に惜しみなくお金が使われている。少なくとも私にはそう見えませんでした。学びの拠点にこそお金を使って、社会全体の底上げをしないと社会格差が拡大してしまう。社会不安を防ぐためにも、市民に開かれた公共図書館は充実させておかなければいけないという事情がありました。

また、その後に韓国へも電子図書館事情を知るために出かけましたが、アメリカ同様に図書館を大切にしています。韓国は学歴社会で受験戦争が激しく、国民の上昇志向も強いといわれています。それをサポートする学びの環境が整っているのです。驚いたのは、ソウル近郊にある本市人口とほぼ同数の都市に、アンフォール規模の図書館が四つも五つもあったことです。学生も社会人も猛勉強を迫られるものの、都市部の狭い集合住宅では集中できない。そこで身近にある図書館で夜遅くまで勉強します。夜中の二時、三時まで「どうぞご自由に」という図書館もありました。

これら学びの場の充実度合いを知ると、「日本は何をやっているのだろう」と愕然とさせられました。知の向上や次世代の学びの環境づくりが「もったいない、税金の無駄遣いだ、金をかけてはいけない」なんて、もう情けないとしか言いようがない。「米百俵」の逸話が忘れ去られてしまったこの国の未来は、本当に大丈夫なのかと率直に感じました。「箱モノ＝悪」という世論がとても低俗に思われます。

しかし、もしも安城がこうした世論に逆行して充実した学びの空間をつくれれば、他の都市に大きな差をつけることができるかと思っただけです。加えて単に「図書館ができたね」で終わりとはせず、その中にあるICT環境や機器もさりげなく最先端のものを揃えて、よりいっそうの差別化を図りたいとも考えました。

複合施設は類例のないスキームで

市長 PFIという民間資金を活用した手法をアンフォーレ建設計画に選択したとき、最終的に二つの設計計画案が残りました。一つは今の明るい雰囲気のある建物、もう一つは秘密基地のようなデザインの家でした。選定委員会ではさまざまな観点から議論をしましたが、結論は二分し平行線をたどりませんでした。結局、意見はまとまらず、私のところに二案が持ち込まれ「この二案の甲乙をどうにもつげたいので、市長、ご意見をください」と言われたのだけど、私にだって白黒を簡単に決められません。

そこで私は「選定会議には女性はいるか、いないなら女子職員の意見を聞いてみたらどうか」と、女子職員の意見聴取を勧めました。すると、圧倒的多数で現行建物の案が支持されました。私の心中には、「女性に好まれる建物、女性が集まる施設にしたい。そうなれば、男性は放っておいてもそこに来るだろう」という打算が若干ありました(笑)。女子職員からの「外からの見通しがよい建物だから安心して施設に入れる」という感想を選定委員に伝えました。ただ、もう一方の秘密基地のような建物も、私たちが簡単に判断をつけられないほど良かった。選択した側ではありませんが、非常に残念に思っています。

ところで本市でも行政改革を進めてきましたが、私は図書館職員の人件費について、単なるコストダウンの視点からの削減を求めたことは一度もありません。かねてより「民間活力で図書館運営を」という手法がブームになっていましたよね。そこでそうした図書館へ見学に行ってみると、カフェの開設など人をひきつける工夫がなされ、開放的な空間に設計されている。非常に感心させられました。ほかにも複数の指定管理者制度導入館にこっそり入館したことがあります。駅ビルと一体化した図書館もあって最高の立地とやらやんだのですが、図書



図書館の運営は市の直営

若者と商店街に託す期待

——開館からしばらく経って一息ついたかと思いますが、

市長 開館から三年ちかくが経過し、アンフォーレ全体の入館者数は年間一二〇万人、一日平均三五〇〇人ほど（コロナ禍前の状況）と高止まりしていますが、図書館に立ち寄る人の割合がそれほど上がっていないことが

館員と利用者とのやりとりを見ていると、どうも深いコミュニケーションはなさそうでした。民間委託というのはこういう素っ気ないものなのかという印象をもちました。

民間委託では、条件の良いところがあれば、すぐにそちらに働き手が流れたり引き抜かれたりしてしまうとも聞きます。私がそのときに見た光景からは、業務として本の貸し借りの作業をしているだけで、来館者に良い本を読んでもらおうという図書館員の意欲が伝わってきませんでした。そんな対応で、未来を担う人材を育成できるのかとの疑問をもちました。これが民間流の合理的運営だとして、導入できないなと感じました。だから図書担当者から「市の直営でいきたい」と言われたとき、共鳴したのです。全国的に図書館の民営化が進むのなら、かえって市直営へのこだわりがアンフォーレの魅力になるとも考えました。

やや気になります。もう少し図書館に足を運んでくれる人の比率が上がるといいなと。

アンフォーレには中心市街地活性化という目的もあり、まちの活性化イベントも開催されます。大勢の人が集まるそういった場へ、商店街の人たちにも出張販売をしに来てほしいですね。わが店の自慢の一品、二品を並べておけば、みんな手に取ってくれるのではないかな。「もつとほかの商品はないの?」と聞かれたら、「本店がすぐ近くにあるから、そちらにもつといろいろな品が揃っています」と促せば、「じゃあ、今度行くね」と話が弾む可能性もある。商店街が共同で売り子さんを雇い、もつと別の商品を求めたくなる上手な誘導をすれば、効率の良い商売につながるのではないだろうか。

またアンフォーレにさらに多くの人の出入りがあれば、二階以上の図書館スペースへ上がってゆく人も増えるはず。一階エントランスホールへは気楽においでくださっているので、何かの拍子に「ちよつと本も見てみよう」と暇つぶしに上がってくれる可能性があります。ともかく足を踏み入れてくだされば、アンフォーレの図書館は昔とはずいぶん雰囲気が変わると気づいてもらえるはず。

私は四四歳で市長に就任したとき、安城を災害に強いまちにするを誓い、まず木造老朽住宅が密集する中心市街地の整備計画を立てました。その中心にあった総合病院の広い跡地がアンフォーレの建設用地となりました。

政治家は常に選挙を意識してついつい票になる人たちの機嫌をうかがうきらいがあります。圧倒的に投票率が高いのは高齢者ですので、その世代の人たちを大切に考えがちです。そのため、若年層向けの政策はなおざりになりがちなのです。でもよくよく考えてみれば、孫世代が喜べば、おじいちゃんおばあちゃんも嬉しいはずですよ。孫たちが楽しそうに図書館に行つて「勉強してきたよ」「本を借りてきたよ」と話してくれれば高齢者も嬉しい。実際は若い世代が喜ぶ方向へ公共投資を振り向けたつて、選挙で苦しむばかりではないのです。

このように政治の仕事は、狭い地域や特定の世代へ喜びを与えようとするのではなく、もつと大きな視角で社

おわりに

アンフォーレは二〇二二（令和四）年十二月現在、オープンして五年六カ月が経過した。私はアンフォーレがオープンした二〇一七（平成二十九）年度に一年間アンフォーレ課主幹として勤務したのち他課へ異動、再び二〇二〇（令和二）年度に二代目アンフォーレ課長兼図書情報館長として配属となった。したがって、オープン前と二年目以降については詳しくはなく、本書で初めて知ったことが多い。一大プロジェクトの渦中にいた市長をはじめ議員や職員、スタッフ、関係業者の奮闘ぶりがわかり、改めて多くの方々の汗と涙の結晶がこのアンフォーレであるという認識をもつに至った。

課長として赴任してきた二〇二〇年四月は新型コロナウイルス感染症が蔓延し始めた時期であった。私のアンフォーレにおける業務は感染防止対策を実施することから始まった。その後、第四次安城市子供読書活動推進計画の策定、ICT機器の更新、指定管理者の選定・契約、南館のスーパーマーケット撤退など、次々と新しい業務に翻弄され現在に至っている。

しかしながら、時間を見つけて館内を散策すれば、そこここに絵本を楽しんでいる親子、試験勉強に必死な中高生、何冊も本を広げて勉強中のリタイア後と思われる男性などを目の当たりにし、ここは市民に開かれた学びの場であることを実感している。高齢の妻が同じく高齢の夫に雑誌を読み聞かせている光景に出会い、ほのぼのとした気持ちになったこともある。

「安城市中央図書館」から「安城市図書情報館」へと名称を変更し、最新の情報機器を揃え、館内展示やSN

S等で情報を発信しているが、一方では豊富な蔵書とスタッフの笑顔と接遇に支えられたバランスの取れた生涯学習施設であると思っている。

今後も市民一人ひとりの探求心や好奇心に応えるべく、さらには生活上の困難や疑問、仕事上の必要など、人生のあらゆる場面に対応できる図書館でありたいと思う。社会環境、自然環境などを考えると、未来は明るいとさえ言えないが、アンフォーレを頼りにして豊かな人生を送っていただきたい。

私たちは、これらを実施していくために「安城市図書館運営基本計画」(二〇二〇～二〇二九年度)や「第四次安城市子供読書活動推進計画」(二〇二二～二〇二五年度)を策定しており、地道に着実にサービスを拡充し、一人でも多くの市民に親しまれる施設をめざしている。

また、アンフォーレは、現在のコロナ禍では来館者数は減っているが、通常では年間を通じてイベントが開催され、一日当たり約三千人の来館者でにぎわっている。そのにぎわいをまちなかへ波及させ回遊性を向上させることが重要かつ優先課題である。今後もアンフォーレを起点に新たな文化の創造とそれに伴う人々の交流が新しい安城のまちの創造に寄与することは間違いないだろう。

本書は、アンフォーレができるまで、そしてできてからの顛末記である。そして、このプロジェクトに関わった多くの人々の気持ちの集大成でもある。図書館やまちづくりに関心をもつ方々のささやかな参考になればこんなに嬉しいことはない。

最後に、お忙しい中、原稿をご執筆いただいたみなさま、インタビューにお答えいただいたみなさま、また、編集に尽力された岡部晋典さま、ありがとうございました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

二〇二三年一月吉日

元安城市市民生活部アンフォーレ課 課長兼図書情報館長 横手憲治郎

[編者プロフィール]

岡部晋典 (Yukinori Okabe)

1982年生まれ。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程単位取得退学、博士(図書館情報学)。複数の大学の専任講師等を経て、現在、株式会社図書館総合研究所主任研究員
研究テーマは選書論、オープンアクセス、図書館とライフストーリー等
主著に『トップランナーの図書館活用術 才能を引き出した情報空間』(勉誠出版, 2017) など

アンフォーレのつくりかた

図書館を核としたにぎわいの複合施設

2023年2月1日 初版第1刷発行

検印廃止

編者 岡部晋典

発行者 大塚栄一

発行所 株式会社 樹村房

〒112-0002

東京都文京区小石川5丁目11-7

電話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

振替 00190-3-93169

<https://www.jusonbo.co.jp/>

組版・印刷／亜細亜印刷株式会社

製本／有限会社愛千製本所

©Yukinori Okabe 2023 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-376-6 乱丁・落丁本は本社にてお取り替えいたします。